

平井俊榮著

『中国般若思想史研究—吉蔵と三論学派—』

岡部 和雄

一

長年にわたり一貫して三論の研究を推進され、毎年数篇の新しい研究業績を発表し続けてこられた平井俊榮教授によって、『中国般若思想史研究—吉蔵と三論学派—』と題する大著が公刊された。本文七百頁を越すこの浩瀚な研究書は、著者がこれまでの研究を集大成して東大に提出した学位論文「吉蔵を中心とする三論学派の研究」から資料篇を省いてそのまま印刷に付したものとされる。

三論学派やその大成者吉蔵の研究は、インドの中観仏教の研究なканずく中論研究、竜樹研究などの盛行に比すれば実に寥々たる有様で、現に今日までこれをテーマにした本格的な研究書はついに著されることがなかったのである。これにはさまざまな理由が考えられ

ようが、何といっても吉蔵の著作が厩大にすぎ、しかもその思想が晦渋で把えどころがないと見られていたからではなからうか。それはともあれ、三論学派や吉蔵の果たした役割が中国仏教思想史の上にそれにふさわしい位置づけがなされるためには、まず吉蔵の全著作を視野に納めた基礎的な文献研究、精密な実証的研究が前提として要請されねばならないことはいうまでもない。

本書はまさにこうした要請を十二分に満足させるすぐれた本格的な研究であり、今後この分野の研究は本書の出現によって飛躍的に進展することが期待される。

ところで本書を一読してまず感心することは、歴史研究と思想研究を見事に結合させた点である。両者はとかく一方に偏しやすく、しかも緊密な連絡を欠くことが多いのである

が、本書にはその弊が全くといっていいほど見られない。本書が歴史と思想を二つの軸とする研究であることは、本書の構成の上からもうかがわれる。すなわち「第一篇、吉蔵から見た三論学派の成立史的研究」は、三論学派が形成される過程を歴史的に追求した研究で、「吉蔵から見た」と冠せられたのは、吉蔵の証言を重視する方法が採られたからである。「第二篇、吉蔵における三論教学の思想的研究」は、体系化の志向をもたなかった吉蔵の三論教学を構造的に把えなおそうと試みた研究である。このように前者は歴史篇、後者は思想篇であるが、このいずれにも著者の厳正での確な文献操作、鋭い問題関心と洞察力、卓越した教理理解などが示され、明快で説得的な叙述と相俟って、本書の学的価値を高からしめている。

二

本書にはまず「三論とは何か」「吉蔵と三論—日本におけるその研究の回顧と展望—」「本書の組織と大綱」からなる「序論」が置かれてある。入門篇とでも称すべきものであるが、明治以前と以後に分けてたどられた三論研究史は、本書がもつ画期的意義を理解す

る上でもとくに有益であろう。

第一篇はまず「序章」で中国三論宗の歴史的性格が論じられ、南都三論宗の伝承に従って中国にも三論宗という宗派があったかのごとく受けとられているが、これは誤りで、いかなる仏教史料に徴しても宗派として登場することはなかった。したがって正しくは三論学派と呼ぶべきであるとする。「第一章、三論学派の源流系譜」では羅什から吉蔵にいたる三論学派の系譜について従来の三説（凝然、前田慧雲、境野黄洋）を批判しその不備を指摘しながら、この問題を解決するには吉蔵自身が三論の源流や系譜についてどのように考えていたかが重要な決め手になると見る。そして吉蔵が三論の源流系譜についてしきりに使う「関河旧説」という言葉に着目し、その意義を検討し、関は関中、河は河西で、前者は長安の羅什およびその門下、後者は道朗の一派を指し、その両者を併せて強調したところに吉蔵をとりまく当時の思想的状況とそれへの彼の苦心の対応がうかがえるとす。すなわち吉蔵は涅槃・法華の権威として知られる道朗の説が関中の羅什一門の説と一致すると主張することによって、当時圧倒的な優勢を誇っていた成実学派に対抗しようとしたの

である。

ところで関中における三論研究の興起・隆盛とその江南への播伝の歴史的経緯をたどったものが、「第二章、三論伝訳と研究伝播の諸事情」である。まず羅什および門下による中・百・十二門の三論、『智度論』『小品般若』などの翻訳をたどり、つぎに羅什門下の三論研究として僧叡・曇影・僧肇をとりあげ、かれらの伝記・著作・思想的特質を詳論する。とくに注目すべきは、吉蔵が依用することの多かった曇影の『中論疏』（逸文）を可能なかぎり復原して紹介したこと、僧肇の体用相即思想の意義を高く評価するとともにこれが吉蔵に正しく継承された点を論証したことである。ところで三論研究がいかにして江南に伝播したかは従来不明な点が多いとされてきたが、著者はこの難問ととり組み、従来の学説を批判するとともに新しい研究の実はあげている。まず江南伝播に果した盧山の慧遠教団の役割に注目し、門下の道生、慧観、慧嚴、道温ら南方出身で長安への留学僧たちの功績を検討し、さらに僧叡と慧叡を同一人と見る横超慧日、R・H・ロビンソン両教授の説をふまえながら僧叡が江南に三論を伝えたことを論証する。また僧導およびその

門下が江南伝教に果した役割については、従来過大に評価された嫌いがあると批判し、これらの仏教は三論・成実の併習であって純粋な三論学の発展に資したかどうかには疑問があるとする。

「第三章、三論教学成立史上の諸問題」でははじめに三論研究史上の暗黒時代ともいべき宋齊時代における般若三論研究の動向を概観し、一般的傾向としては三論・成実の併習が盛んで、三論研究は成実研究の後塵を拝していたとする。しかしその中であって周顒の『三宗論』と智琳の『中論疏』は、江南における三論学復興の原動力となったもので、三論教学成立史上特筆されるべきであるとし、この二著について詳論する。また吉蔵の著作に見える「北土三論師」が、江南の三論学派とは異なる北地の三論学派があったことを示唆したものがどうかについて考察し、これが法瑤の『中論疏』の所説を匿名で引いたものにすぎず、したがってかかる学派の存在を想定することはできないと結論する。さらに新三論と古三論を分ける従来の議論を再検討し、とくに羅什が伝えた竜樹・提婆系の三論を古三論、日照が伝えた清弁系の三論を新三論とする前田慧雲説の成立しがたい理由を

述べ、新古を分けるとすれば僧朗以前と以後に区分するのが最も妥当であると見なす。

「第四章、撰山三論学派の成立—三論の復興」ではまず撰山三論の淵源となった棲霞寺の創建について述べ、やがて僧朗が南遊して撰山に入り三論学を復興する経緯が語られる。僧朗と周顒が師弟関係にあるとする吉蔵の説は、従来疑わしいとされてきたが、著者は吉蔵の証言を重視する立場から再びこの問題をとりあげ、吉蔵説を全くの虚構とは見なさず、両者の師弟関係は吉蔵の証言通りであれその逆であれ、ともかく両者の出会いは年代的に可能であったと見る。また僧朗のあとをうけ撰山三論学派を名実ともに確立したのは僧詮であるとし、その学風の定慧双修的特徴はやがて門下に法朗のごとく主として僧詮の般若三論学を継承する者や慧布のごとく坐禅三昧の面を継承する者などを輩出したことを指摘する。

「第五章、興皇相承の系譜—三論の発展と分極」は、興皇寺法朗とその門下に見る多様な三論学の発展を論じたものである。法朗門下の逸材として吉蔵、智炬、慧哲、大明の四人をとりあげ、それぞれの系統に連なる三論学派の人脈を詳細にあとづける。すでに僧詮

門下にもその傾向が見られたごとく、法朗門下についても学解講論者と三論系習禅者の分極化が絶えず現われる。前者の系譜には吉蔵、智炬、慧哲の系統があり、後者の系譜には大明法師の系統がある。この大明法師門下からは多数の習禅者が輩出され、かれらのある者は達摩系の禅者と合流していったとする。著者によれば、三論は天台に吸収されたとする従来の見解は訂正さるべきであり、大局的に見れば三論学派は達摩系の仏教の中に発展的解消を遂げたと推定される。なお法朗およびその門下に顕著な特色は『涅槃経』が重視され、その研究講説が盛んに行なわれたことである。思想的に見れば『涅槃経』の仏性思想は、三論学派による否定的媒介を経て初期禅宗に継承されていくという仮説が提出されることになる。

三

第二編では「序章」で嘉祥大師吉蔵の伝記が考察され、続いて「第一章、吉蔵の著作」ではかれ自身の著作とされるものについて主として撰述の前後関係をめぐって検討が加えられている。現存する二十六部のうち、撰述年代の明記があるものは二部にすぎず、他の

多くは年代はもろろん、その前後関係すらはつきりしない。著者はそれら相互の引用の精査と思想研究にもとづく鋭い直観によって、吉蔵の代表作をつぎの三期に分ける。すなわち会稽嘉祥寺時代のものとしては『二諦義』と『法華玄義』、揚州慧日道場時代を中心とする中期のものとしては『勝鬘宝窟』と『三論玄義』、長安日嚴寺時代のものとしては『中観論疏』と『浄名玄論』がそれである。なお現存する五部の法華註疏の撰述順については横超説とその批判説とを検討し、前者に軍配をあげている。なお『奈良朝現在録』その他の経録には吉蔵の著述として記載され、現存しないものが十一部にのぼるとし、この中でとくに問題となる『涅槃経疏』と『三論略章』をとりあげる。前者については著者はかつて日本三論学者の末註から逸文を拾集して復原を試みた（これは「吉蔵著『大般涅槃経疏』逸文の研究」として『南都仏教』二七〜二九号に発表されたが、本書には収録されていない）が、ここでは研究の要点を記すにとどめ、本疏が南本『涅槃経』の註疏で二十巻からなり、すでに会稽嘉祥寺時代後半には成立していたと見る。『三論略章』は経録では三巻本とされるが、同名の一卷本が統蔵経に見出され、

「胡嘉祥法師導義之要」と記されている。著者は一巻本を吉蔵の他の著作と対比して検討し、これは三巻本『三論略章』のごときものからかなり粗雑な抄録ではないかとし、また三巻本についても吉蔵の真撰と見なしうる確証はないとする。

「第二章、吉蔵思想の論理的構造」は「第四章、三論教義に関する二、三の問題」とともに吉蔵の仏教思想を体系的または構造的に把握しようと試みたもので、晦渋をもって知られる吉蔵の三論学の骨格がダイナミックにしかも鋭く分析解明されている。吉蔵の著作に対する著者の並々ならぬ造詣の深さが感取される。ところで三論学派は無得正観を根本基調とするといわれるように無所得を標榜する。無所得は空性の実践的な表現には違いないが、有所得の単なる否定ではないとされ、そこに三論独自の有無の相即観が展開される。すなわち吉蔵によれば、因縁仮名による有無の二の相即と、有無の二と非有非無の相即という二重の相即関係として把えられるとされる。この「二にして不二、不二にして二」と定式化される吉蔵の相即観は二不二を明かす般若空観思想と不二二を明かす如来蔵仏性思想との融合相即をも必然的に可能にする。

吉蔵は無得正観の根本基調をしばしば「仏法の大宗」とも呼んだが、それは空観に基づく中道こそ仏性にはかならないというかれの確信の表現である。

さて吉蔵は二と不二の相即という根本命題を展開して、教学上のさまざまな基礎範疇を作り出す。その中で最も重要なものが「理と教」「体と用」「中と仮」などである。たとえば「理と教」については、無言の理が不二中道であり能表の教が三論の二諦であるとされ、また有無の二が教であり非有非無の不二が理であるともいう。ところで吉蔵は「三論初章」と呼ばれる四節の定型化した文章をよく用いるが、これは三論教学の根本主題を有無の相即として論理的に定式化したもので、三論教義の序章ともいべきものである。吉蔵が論積の際に用いる四種積義（依名積、因縁積、理教積、無方積）も基礎範疇として重要であるとし、とくに因縁積と理教積に三論的特質が見られるとしてこの問題を掘り下げ、横論、豎論への展開をたどり、三種中道の解釈に及ぶ。また吉蔵にあって初章と中仮の異同がどう認識されていたかを問ひ、この両者が思想的には連続したものでありながらも厳密に区別されていたとし、そこに初章と

中仮を同一視しドグマ化した中仮師を吉蔵が批判する意義が認められるとする。

つぎに約教の二諦と特徴づけられる吉蔵の二諦説をとりあげ、まずその成立の背景をさぐる。約教の二諦は三論学派の伝統的主張で、成実学派の約理の二諦に対する反論の形で確立され、僧朗、僧詮、法朗から吉蔵へと受けつがれてきたものである。著者はこの二諦説の原型は、関中の曇影や僧肇の著作にすでに見出されるとし、近年佐藤哲英教授によって提唱された広州の大亮の創始にかかるとする説を批判する。さらに吉蔵二諦説の発展的構造を示す「三重二諦」「四重二諦」をとりあげ、前者は南地の成実に対し、後者は北地の撰論に対抗するためにつくられたとする。

「第三章、吉蔵の經典観と引用論拠」は博引傍証をもって鳴る吉蔵の経論への対し方を探り、かれの教学形成の背景を考察したものである。まず吉蔵の經典観にふれ、大乘經典に絶対的な優劣や序列をつける方法をとらなかつたとし、これは空観というかれの立場から当然であるとしつつも、当時流行の教相判積の經典観に対する厳しい批判であったと見る。その具体的な例は南北の五時四宗説の批

判にうかがえるとする。

つぎに吉蔵の二蔵義と三論説を教判論の一種と見なす従来の見解に再検討を加え、これを教判論の範疇で把えることの誤りを指摘する。吉蔵の著作に引かれた経論については、国訳や研究のない『法華玄論』と『浄名玄論』を精査し、すでに先学の研究のある『勝鬘宝窟』と『中観論疏』をこれに加えて総合的に考察する。その結果、経では『涅槃経』、論では『智度論』の引用が際だって多いことが確認される。つぎに『涅槃経』の引用形態の特徴を追求し、好んでくり返し経証として引用される特定の章句は、空観と仏性の融即を説く師子吼品に集中しているとし、ここに空観思想の中国的体質がうかがえるとする。

「第四章、三論教義に関する二、三の問題」

は、三論教学の枠組みまたは教義の大綱をどのように押えるかという問題に対して著者の見解を示したものである。教判的な思考を排した吉蔵の教学は、整然とした理論体系の構築を志向するよりは、無所得空という仏教の原点に絶えず回帰しながら理論の固定化・ドグマ化を根底から批判しようとする姿勢で一貫していた。そこに吉蔵の思想の把えどころ

のなき、難解さがあるわけであるが、著者は二諦義、二智義、仏性義の三者に考察の焦点を絞り、この難問に答えようとする。まず二諦については第二章で約教の二諦がすでにとりあげられているが、ここでは最もユニークとされる「於・教の二諦」（於諦と教諦）を問題とし、さらに二諦相即論が改めて考察される。吉蔵の相即論が成実学派の相即論を批判・超克して生みだされ、三論学派独自の相即の論理へと展開した点があとづけられている。また中道為体説（二諦は中道を体と為すとする説）や三種中道説（世諦中道、真諦中道、二諦合明中道）にもその成立には同様の歴史的経緯が認められるとする。さらに二諦の相即は、二諦観という観法としても成立することが指摘され、三論学派の三種並観が説かれる意義にも言及されている。

ところで吉蔵の教学にあっては二諦は総して教であるが、この教についてさらに体用に分けると教の体が二諦であり、教の用が二智であるとされる。二諦の重視が二智の重視に直結する所以である。二智とは般若と方便を指すが吉蔵はこれを菩薩に特有の二智とし、般若道、方便道の二道にはかならないとする。また般若道には三を開き三種般若（実相般若、

観照般若、文字般若）とする。二智は菩薩の十地の修道に配され、二智の並観として説かれる。このように三論学派の二智義には菩薩の行道の体系ともいべき実践的契機が顕著であるとする。

つぎに吉蔵の仏性思想が論じられる。まず五種仏性説（境界仏性、観智仏性、菩提果仏性、大涅槃果果仏性、正性）の成立を考察し、それが南北朝の智蔵、僧旻、慧遠の仏性説の影響をうけながらも、そのいずれとも質的に異なる独自の展開を示したとし、それは中道第一義空をもって正性（正因仏性）となした点にあるとする。この正因仏性がなぜ正性とも中道仏性とも呼ばれたかその典拠と意義が追求される。かくして吉蔵の仏性説は総じて理仏性的傾向が強いといえるが、「仏性は修せざれば得せず」（『涅槃経疏』）という主体的な行道の世界が展望されていることを明らかにする。

「第五章、三論教学の思想的意義」は三論学派の思想がのちの中国仏教の思想的展開にどのような関わりをもったかを追求したもので四編の論文から成る。「中国仏教における不空の概念」（第一節）は、インドの中観派では空の反対概念として否定の対象でしか

なかった「不空」が、中国の三論や天台では「仏性の妙有を見るを不空を見ると名づく」

（『中観疏論』）「不空とは即ち是れ智慧の性なり、見仏性に名づく」（『維摩経玄疏』）などとして積極的・肯定的に表現されている点を問題にし、これは空観の論理の必然的展開ではなく、本来は如来蔵や仏性を表わす術語概念であった不空が、吉蔵や智顛によって空観の論理に転用されたことによることを明らかにしたものである。「一行三昧と空観思想」（第二節）は一行三昧の中に空観と禅の双方に共通する思想的基盤を見ていこうと試みたものであり、「 \wedge 無住 \vee 」の概念の形成と展開」（第三節）は同様に無住という概念の形成・展開を通して吉蔵の思想と禅者の思想との間にきわめて親しい関係を見出しうることを論証したものである。さらに「南宗禅成立の一視点」（第四節）では三論学派も南宗禅も『涅槃経』を重視したが、それは南北の涅槃研究を批判・止揚したきわめて般若・三論的な『涅槃経』であったとし、このような『涅槃経』と『般若経』の相即観は、吉蔵の思想の際だった特色であるが、慧能ないし神会の思想にも共通するものが見出せるとする。

四

以上、本書の叙述に沿って各章節の要旨を簡単に紹介したが、甚だ要領を得ない雑駁な紹介で、本書のすぐれた内容が不十分にしか伝えられていないのではないかと恐れる。とくに著者の提示した多くの新見解についてその意義や重要性を論ずるにいたらなかったことを残念に思う。著者および読者のご宥恕を乞う次第である。最後に評者の素朴な注文または感想を二つほど。本書の骨子となった個々の論稿は、すでに学会誌その他に発表され、学界の評価も定まっているものが多いように思われる。そこでできればそれらを巻末にでも一覧表にして示し、初出の年時や誌名などを明記し、重要な追加、訂正などがなされた場合はその旨を追記してほしかったと思う。また本書には、思想、教学、教学思想、教義、教理、宗義などがそれぞれの文脈の中で適当に使い分けられている。それはそれで無理に統一する必要は全くないと思うが、これらの言葉を使い分けるならどう区別して使い分けるか、相互の関連はどうかなどについての著者の見解が聞きたかったように思う。

（本文七〇二頁、はしがき・目次一二頁、英

文目次・英文梗概・索引四一頁、春秋社、昭和五一年三月刊、一〇、〇〇〇円）